

晶子さんちの時計塔

— 『住吉堺名所并豪商案内記』 にみる与謝野晶子生家の「時計」について —

井 溪 明

明治16(1883)年川寄源太郎著『住吉堺名所并豪商案内記』(通称『豪商案内記』、以下そう略する)で知られている明治前中期堺中心部の大店の表構えや商売の一端を描いた横長小判の銅版画帖がある。これは当時全国的にも流布し始めていた各都市の商店を中心とした案内記の一連かとも思える銅版画帖で、同年にも幾つかの都市のものが出版されている。

この『豪商案内記』に、堺の地に生まれ育った与謝野晶子の生家駿河屋も含まれており、その店構えについて些か面白く思えることがあるので書き留めておきたい。

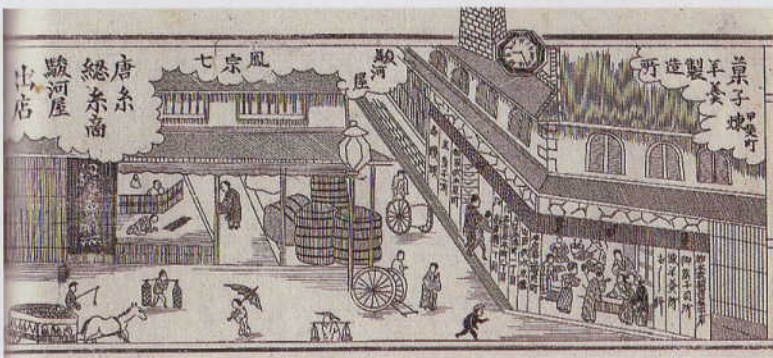
晶子の生家駿河屋は、横長画面の右頁に、「甲斐町菓子練羊羹製造所駿河屋、駿河屋鳳宗七、唐糸総糸商駿河屋出店」と紹介コメントが添えられて描かれている。真ん中の道を挟んで右の菓子店「練羊羹製造所駿河屋」の開口部には三箇所本店支店名などを記した縦形文字看板がしつらえられ、その奥に内部の様子が垣間見れる。店の中では客とその応対に出る店員が描かれ大福帳らしきものも広げられている。道を挟んで南側、つまりは左側の「唐糸総糸商駿河屋出店」は糸物を扱う店で、開口部左には「総糸売捌所」と染め抜かれた布看板が掛かる。店の土間には縄で括られた荷が幾つも置かれ、左の方には結界で仕切られた帳場が置かれているが、右の菓子店の賑わいと対照的な商いの雰囲気描かれている(与謝野晶子の生家は、昭和20(1945)年の戦災で焼失し、その後の道

路拡幅などもあり痕跡をとどめてはいない。現在は、生家があった場所の西側歩道敷に生家跡碑が建立顕彰されている)。

この二つの駿河屋店先でひととき目を引くのが、菓子店の二階の屋根に乗っかるようにしつらえられた八角形の大時計である。その直ぐ左には煉瓦造りの煙突状の構造物が枠外に延びている。ローマ数字風の文字盤に、8時25分過ぎを指した針が描かれている。時計の乗っている二階部分は観音開きの洋風窓が連続し、さらに一階の軒下は石でも貼ってあるのであろうか、石垣状の壁が描かれる。案内記に描かれる100を越える当時の堺中心部の店構えの内でも、特異な店構えとして描かれているのがこの駿河屋菓子店である。なお、左のオーソドックスに描かれる唐糸店にも、店前に街灯ランプとおぼしきものが一際大きく描かれているのは目を引くところである。ちなみにこの駿河屋の情景は、近代堺を代表する郷土画家岸谷勢蔵により、より具体的に描き直されている。

さて、この菓子店の大時計であるが、平野光雄著『明治・東京時計塔記』(昭和33年10月15日・青蛙房刊)中の「文明開化と時計塔」の項に、「明治時代に時計塔機械をもっとも多く、輸入したと思われる商館は、横浜および大阪に店舗をかまえて、幕末以来、機械貿易に不断の活躍をつづけた、著名なファブル・ブランド商館(元治元(1864)年頃創業、館主スイス人James Favre-Brandt,1841-1923)である。

ファブル商館では、懐中時計は主としてスイスから輸入したが、鉄砲類・メリヤス機械・四方時計等の大形のもの、イギリスの諸会社と契約していた(ファブルの四男ハンフリー・ファブルブランド氏談)し、またファブル商館より購入した、横浜弁天通りの河北時計店の時計塔機械が、イギリス製であった(明治・大正時代の横浜の著名な時計商、若松屋(明治2年創業)二



与謝野晶子生家の図

代目店主若松治之助氏談) 事実等に徴して、同商館輸入の時計塔機械は、おそらくイギリス製であろう——したがって、私は本文で、ファブル商館輸入のそれを、疑問符はつけたが、一応すべてイギリス製と記しておいた——と考えられる。このファブル商館で、明治9(1876)年末頃に刊行した小冊子『時辰機取扱心得』は、その頃までに同商館で納入して、時計塔を設置した建物の名称を、次のように挙げている。「{|東京| 本郷医学校、江戸橋郵便局、外神田京屋伊和造出店、八官町小林本店、通四丁目小林出店、上野博覧会。{|横浜| 本町町会所、郵便局、高島町一ヶ所。{|大阪| 区務所、鉄道寮、郵便局、外館江一ヶ所。泉州境江一ヶ所。{|栃木| 栃木県師範学校。{|山形| 山形県師範学校、渥美郡役所」(同本p12~13、後略)とあり、いささか長い引用とはなったが、泉州境(ママ)一ヶ所とは、まさにこの駿河屋のことではないかと考えられる。

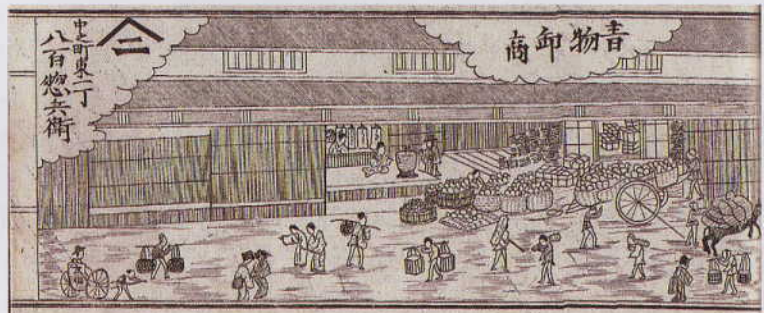
さらに、同本では、時計塔を様式的に、洋風と和風、和洋折衷とに三別し、「和風時計塔は、江戸時代以来の我が国商家の伝統的な建築様式である土蔵造りの建築に、もっともマッチした型と思われる」云々の記述が続くのである。

晶子の生家、駿河屋のこの時計〈台〉は、まさに堺の町の中心部におけるランドマーク的存在であったとも思える(堺ではこの後明治21(1888)年開業の阪堺鉄道(現在の南海本線)堺駅舎に時計がしつらえられるのが、公的なものとしては第1号となる)。

さらに穿って考えるなら、この生家、時計をはじめとして外観からして西洋的気分を取り入れた、何とも堺の町では異空間とも言えるような場所ではなかったろうか。これは、晶子の父宗七の趣味によるところであったのかどうかは、定かではないが、少なくとも堺・駿河屋の気質の中に、明治維新以後の西洋化の波がいち早く堺の地で取り込まれたという証を見ることが出来るであろう。そのことは、時計が取り付けられた2年後の明治11(1878)年にこの家に生まれ、この図が描かれた頃は物心がついていたであろう晶子をして、古い堺の因習から抜け出してゆくための助走を準備していたのでは

ないかとも思える。ちなみに後年短歌に目覚める晶子が、明治29(1896)年に入会した堺敷島会の主事をしてきた真鍋台鎮なる歌人の生業は時計屋であった。堺の町人たちは、この時計台について、更に晶子さんの生家の雰囲気について、どう感じていたのか、残念ながら今のところ文献的な記録は見いだせていない。

ちなみに『豪商案内記』を細見すると、時計が描かれる堺の商家町家はもう一軒、中之町大道筋の青物卸商八百惣兵衛宅で、店前に荷車や馬の背に積んでこられた青物類が所狭しと並べられる奥の帳場の後ろに大福帳と並んで8時頃



八百屋惣兵衛店の図

を指した多角形の掛け時計が見えている。

最初に述べた、同時期頃に描かれた全国に及ぶ銅版図帖では、屋内に時計が描かれる店はまま数え上げることができるが、晶子生家のようにランドマークとなるような時計台が店舗外に据えられるような例は、管見の及ぶ範囲では数件しか見出しえなかった。

時計塔の記録としては、明治27(1894)年銀座にセイコーの前身服部時計店が開店し、時計塔を作ったとされているようであるが、晶子さんちはそれを遡ること、およそ20年前に時計がしつらえられていたことになる。

通常よくいわれる晶子の持つ新進性の寄って立つところの隠れた一つが、このような生家自体の新進性にあったのではないかと晶子研究の門外漢としては思えるのだが、さていかがなものであろうか。

なおこの『豪商案内記』を出版した川寄源太郎なる人物は、本書以外でも10篇以上の都市案内記を上梓している。そしてこの人物、大阪では明治大正昭和前期と、おもちゃ画家としてつとに有名であった川崎巨泉の父とも兄ともされる人物である。(堺歴史史料研究会員)